

温泉旅行

NTR

人妻と

天草白

原作・挿絵／あらくれ

試し読み版

リアルドリーム文庫





第1章	下見旅行1日目・人妻が初めて知った快楽……………	4
第2章	下見旅行2日目・夫に電話しながら背徳の交わり……………	67
第3章	下見旅行3日目・貸切風呂で人妻は体を開く……………	104
第4章	温泉旅行1日目・寝ている夫の側で犯されて……………	132
第5章	温泉旅行2日目・夫ではもう満足できないの……………	185
第6章	温泉旅行3日目・身も心も寝取られて……………	228
エピローグ	その後の日々・すべてを捧げた人妻……………	264

登場人物

Characters

仁科 由美子

(にしな ゆみこ)

結婚3年目の新妻。たわわに実った乳房や尻丘が魅力的なナイスバディ。明るく朗らかな性格。しかし、突発的な出来事に弱く周囲の状況に流されてしまう面も。

海藤 謙太郎

(かいとう けんたろう)

人当たりが良く、住民から信頼を集める町内会長。一見、気のよさそうな雰囲気だが、絶倫の精力と熟練の性技で何人もの人妻を貪ってきた中年太りの男。

仁科 弘行

(にしな ひろゆき)

由美子の夫。大手メーカー勤務。善良な性格で妻を心から愛している。



第1章 下見旅行1日目・人妻が初めて知った快樂

「ふあゝあ……由美子、忘れ物ないか？」

ドアのところ立っている夫の弘行は半分寝ぼけ眼で、しかもパジャマ姿だった。出勤時間にはまだ間があるのに、わざわざ早く起きて見送りしてくれているのだ。

そんな夫の氣遣いが嬉しいものの、申し訳なさも感じてしまう。

「うん、大丈夫」

仁科由美子は微笑み混じりにうなずいた。

ショートヘアの黒髪が、初夏の朝日に照らされ美しい艶が出ている。長い睫に縁どられたアーモンド形の瞳。形よくカーブを描く眉。通った鼻筋に、ぷるんと柔らかさうな唇。

二十九歳という女盛りの美貌は輝かばかりだった。

ルックスだけでなく体つきも申し分なく、ブラウスにスカートというシンプルないでたちが、むっちりと肉づきのよいスタイルを映えさせていた。

ブラウスの胸元を内側から押し上げる、こんもりとした二つの盛り上がり。美しい

くびれから、スカートの布地越しにもわかる肉感的なヒップラインへと続く女体の曲線は、人妻の成熟した色香をふんだんに漂わせていた。

（暑い——）

まだ早朝だというのに、すでに日差しが強い。

あちこちからセミの鳴き声が聞こえてきて、すっかり真夏という様相だった。

「由美子は予定外のことにも弱いんだから、よく考えて行動するんだぞ」

「大丈夫だって。それに会長さんの奥さんが一緒なんだし」

今日は町内旅行の下見に行くことになっていた。メンバーは町内会長の妻と由美子の二人である。

一年前に新居を買い、引っ越してきた由美子たち夫妻は、近所付き合いを良くするために、こういった行事には積極的に参加するようにしていた。

会長の妻とは、町内会の行事を通じて仲良くなったこともあり、今日の下見旅行は前々から楽しみにしていたのだ。

「だから心配なんだって。迷惑かけちゃダメだぞ」

弘行が言葉通りに不安げな表情を浮かべた。

しつかりしているようで、どこか抜けている——と、以前に夫から言われたことを

思い出す。

自分では、そんなことはないと思うのだが……。

「了解しました」

由美子はにっこりと手を振る。

「じゃあ気をつけて。会長さんの奥さんによろしくな」

「うん、行ってくるね」

由美子は微笑み、それから付け足した。

「ひろくんも二度寝して仕事遅刻しちゃダメだよ」

結婚三年目になるが、未だに夫の呼び名は『ひろくん』である。周囲からはラブラブ夫婦だとか、いつも惚気ているだとか、冗談交じりからかわれることもあるが、そんな反応も心地いいものだった。

「ああ、わかってる。行ってらっしゃい」

「わたしも町内会のお仕事がんばってきます！」

元氣よく告げて、由美子は家を後にした。

待ち合わせ場所に着くと、背後からクラクションが鳴った。

「奥さんこっちこっち」

と、声がある。

振り返ると、一台の車がすぐ側で停車した。窓が開き、運転席に座っている人物がこちらを見る。

六十代半ばの、にこやかな笑みを浮かべた男だった。

禿げ上がった頭頂部に、丸くて大きな鼻と分厚い唇。いかにも気のよさそうな雰囲気である。

町内会長を務める海藤謙太郎かいとうけんたろうだった。

「会長さん!」

「まあ、とりあえず車に乗ってくれませんか。理由は中で話しますので」

「は、はい」

由美子が助手席に乗りこむと、車が発した。

「実は家内が急に風邪を引いてしまいました。まあ、たいしたことはないんですがね」
運転しながら、会長が事情を説明し始める。それから、チラリとこちらに視線を向けて言った。

「あ、シートベルトをしてください」

会長が一人だったことに驚き、シートベルトをすることも忘れていたことに気づく。言われた通りに装着すると、豊かな胸の谷間にベルトが通り、膨らみが強調された格好になった。

薄手のブラウスのせいで、盛り上がった乳房の形が確認できる状態だ。気のせいとか、会長がそこに視線を向けている気がする。

少し気恥ずかしかった。

「そうなんですか、奥さんが……」

羞恥を誤魔化すために、由美子は会話に意識を移す。せっかく一緒の旅行を楽しみにしていたのに、残念だった。

「では町内会の温泉旅行の下見はキャンセルに……」

「いえ、それがそうもいかないんですわ」

会長が眉間に皺を寄せた。

「当日ですから旅館のキャンセルはできませんし、旅費も町内会の会費から出しとりますから無駄にするわけにもいきません。それに町内旅行言うても年寄りが多いですからね。色々注文が多いんですわ」

困った様子で言い募る。町内会長ともなれば、そういった要望にもできるだけ応え

なければならぬのだろう。

「下見はしっかりしとかと、と家内が言いましてね。自分の代わりに行ってきてくれと頼まれてしまったんですよ」

「えっ？ あの、それじゃあ温泉には会長さんとわたしで行くってことでしょうか？」

予想外の事態に、由美子は戸惑いを隠せなかった。

いくら人のよさそうな町内会長が相手とはいえ——そして、いくら三十歳以上も年齢が離れているとはいえ、仮にも男と女である。

しかも由美子は人妻である。異性と二人っきりで旅行というのは、倫理的に許容できなかつた。

「本当に急で申し訳ないけども、みんな楽しみにしてる町内旅行のためと思って我慢していただけませんか」

「あ……その、けど……会長とわたしが二人でっていうのは、やつぱり……旅館に一泊するわけです」

角を立てないよう、あまり強い言葉を使わないように気をつけながら告げる由美子。「ワシみたいな爺さんで行っても楽しくないのはわかっとります」

「い、いえ、そういうわけでは」

断るべきだと思うのだが、あからさまに拒絶すれば角が立つだろう。この人のよき
そんな会長が下心を持って誘っているとも思えない。

そもそも相手は六十半ばである。この年代であれば、すでに『枯れて』いる男だっ
て少なくないだろうし、二人つきりで下見旅行に行つたところで、過ちが起きるとも
考えられなかった。

(どうしよう。わたし、どうすればいいの……?)

迷っているうちに、気が付けば高速道路の料金所まで来ていた。ここからでは、さ
すがに引き返しにくい。

「他に頼める人もおらんのですよ。ワシのことは運転手だとも思つて、奥さんは旅
行を楽しんでくれればいいですから……このとおりですっ」

会長が真面目な顔で頭を下げた。その拍子に運転が乱れ、車がわずかにふらつく。

「わ……わかりましたから、会長さんちゃんと前見て運転してください！」

由美子は半ば反射的に叫ぶ。運転が気になって、考えがまとまりきらないうちに返
答してしまった。

会長はすぐに頭を上げ、ふたたび前を向く。

「本当ですか。はあ、よかったよかった」

ホッと安堵したような口元に、かすかな笑みが浮かぶのを由美子は見た。
ふいに、頭の片隅で警鐘が鳴る。

(本当にこれでよかったのかなあ……)

一抹の不安を覚えつつも、車が動き出すと、由美子はすぐに旅行に向けて意識を切り替えた。

二時間ほどして、目的の旅館に到着した。

「着きましたよ、奥さん。さ、行きましょう」

「は、はい」

車から降りると、由美子は会長と一緒に進んだ。

ひなびた雰囲気が漂う、古めかしい木造の旅館である。自然が豊かな場所で、あちこちからセミの声が聞こえた。

チェックインを済ませると、旅館の仲居に離れまで案内された。

「建物は古いですけど、中はすごく綺麗でよさそうなところですね。町内会の予算で本当にここに泊まれるんですか？」

由美子がたずねた。

高級旅館といってもいい様相で、気後れしてしまうほどだ。

「ええ、もちろんですよ」

会長がにっこりとうなずいた。

「ただ、今日はちよつといい部屋を取ってあるんですがね」

由美子は自然と気持ちが高揚するのを感じた。

最初は会長と二人つきりということとで心理的な抵抗感があつたのだが、それはそれとして、自然豊かな景色に心が躍るのは事実だった。

「こちらが離れの『亀の庵』です。どうぞごゆっくり」

丁寧に一礼して去っていく仲居。

「ど、どうも」

礼を返し、由美子は会長とともに室内に入った。

「奥さん、そんなところに立ってないでゆっくりしましょう」

会長は椅子に座り、ゆったりしている。

早くもこの旅行を満喫しているようだった。

「は、はあ……」

その馴染みっぷりに、由美子は若干呆気に取られてしまう。

とはいえ、考えてみれば会長は毎年のように下見旅行に来ているのだろうし、慣れているのかもしれない。

「さっそくワシは露天風呂に行つてきますよ。奥さんも夕食まで好きにくつろいでくださいね」

由美子も会長にならつて露天風呂に入ることにした。

この旅館には男女別の大浴場とそこに隣接した露天風呂、さらに混浴の露天風呂や貸切の家族風呂がある。

彼女がやつて来たのは、女性用の大浴場だった。

(なんでわたし、会長さんと二人で温泉旅館に来ちゃったんだろ……)

脱衣所でブラウスのボタンを外しながら、小さくため息をつく。一人になって気持ちの高揚が落ち着くと、後悔の念がぶり返してきたのだ。

『由美子は予定外のこと弱いんだから、よく考えて行動するんだぞ』

今朝の夫の言葉を思い出す。

自分でもわかつてはいるのだが、いざアクシデントが起きると、つい流されてしまうのだ。そして気が付けば、失敗したり後悔したり……と、なかなかままならないも

のである。

（まあ、断るわけにはいかなかったよね……会長さんにも立場があるんだし、しょうがないか）

由美子はスカートを下ろし、下着も思いきりよく脱ぎ去った。

二十九歳の成熟した裸身があらわになる。

こんもりと盛り上がった乳房は美しいお椀型で、その頂点には薄桃色の乳首が息づいている。

むちむちと肉づきのよい女体は、しかし出るべきところは出ていて、引っこむべきところはきっちりと引っこんだ、見事なグラマラスボディ。

全裸のまま温泉に進み、体を軽く流してから湯船に浸かった。

「ふう……気持ちいい」

胸の下辺りまで浸かったところで、由美子は至福の吐息をもらした。

会長と二人つきりで来てしまったことへの気まずさはあるものの、温泉自体は最高の一言に尽きた。

（ひろくんとだったら最高なのにな）

今ごろ勤務先である大手メーカーでがんばって働いているであろう夫に、由美子は

思いを馳せた。

会長には悪いが、やはり同行相手が弘行だったら……と思わずにいられない。もしそうなら、この下見旅行は何倍も何十倍も楽しかったはずだ。

(でも、今日は下見下見)

気持ちを盛り上げるために、自分自身に言い聞かせる。

(次は本番の町内会旅行でひろくんと来られるんだから。楽しそうなところ見つけておかないやね！)

秋に予定している本番の旅行を思うと、楽しみだった。そのときには弘行と一緒に思う存分楽しむのだ。

夜になり、離れに夕食の膳が運ばれてきた。

「わー、すごい豪華なお料理ですね。ひろくんも喜びそう」

並べられた海の幸や山の幸を目にして、由美子は目を輝かせる。新鮮な刺身や揚げ物、煮物に焼き物、汁物……そのいずれもが美しい彩りと食欲をそそる香ばしさを漂わせていた。

「ささ、奥さんも一杯どうぞ」

会長が笑顔でとつくりを手にした。

「じゃあ、少しだけ」

猪口ちよこに注いでもらい、一口飲んでみる。料理に合う上質な味わいがした。

「このお酒、すごく美味しいです」

頬が熱く火照ってくるのがわかる。ふわふわと体が浮いているような心地もあった。ちようどいい酔い加減に由美子の気分は高揚した。

「そうでしょう、そうでしょう」

会長がにっこりとうなずく。こちらも赤ら顔でほろ酔いのようだ。

「ワシに遠慮せず美味しいもの食って、好きなだけ飲んでください」

由美子はその言葉通り、旅館の料理に舌鼓を打った。

話し上手な会長との雑談も弾み、すっかりいい気分だった。最初は二人つきりということもあって、乗り気ではない部分があったのだが、こうしてみると下見旅行に来てよかったと思う。

会長は終始自分を気遣ってくれているのがわかるし、とても紳士的だ。町内からの人望が厚いのもうなずけた。

「さあ、もう一杯どうぞ」

会長がなおも酒を注ごうと、とっくりを近づけてきた。

「はい、ありがとうございます」

猪口を差し出す手がわずかに震えた。

少し酔いが回ってきたのだろうか。頭がボーッととして、体もふわふわとした浮遊感があつて、なんともいい気分だつた。

注いでもらつた酒をちびちびと呷る。

「ふう……」

酔いがさらに回ってくるのを感じた。

ああ、いい気分——。

「いやあ、しかしうちの町内も子どもが少なくなつてきましたね」

会長が顔を近づけた。

酒臭い息が吹きかかり、由美子はわずかに眉を寄せる。

「奥さんのところは、まだお子さんとか考えておられないんですか？」

「そうですね……積極的にはないですけど、自然にできたらいいな、と夫とは言つてるんですけど……」

「そうですねですか、それはいいっ」

会長は喜色満面に叫んだ。

なぜここまで喜んでいるのだろう、と由美子が訝いぶかしんだところで、とつくりを差し出される。

「さあ、どうぞどうぞ。もう一杯」

「あ……すみません」

「そういうことなら、ワシも手伝えることがあるかもしれませんなあ。あっはっは」
「はあ……?」

何かの冗談なのだろうか？

会長の言葉の真意が理解できず、由美子は首をかしげた。

と——ふわり、と体が浮き上がるような感覚になる。

(あれ、おかしいな……? 頭がくらくらする。少し飲み過ぎちゃったかな)

体中が火照り、軽く汗ばんできた。熱くなった肌を冷まそうと、半ば無意識に浴衣の合わせ目を広げる。

「ふう……」

由美子は熱っぽい息をもらし、後ろの壁にもたれかかった。

豊富な胸の膨らみがわずかに露出するものの、酔っているせいかな、あまり気になら

なかった。

気が付けば、裾も乱れているような気がした。見下ろすと、むっちりした太ももが付け根近くまであらわになり、下着まで見えそうになっている。

いけない、こんな格好で——と思うものの、意識がボーッとして気が回らない。

「大丈夫ですか、奥さん。そろそろ休んだ方がいいかもしれませんな」
会長が近づいてきた。ハアハア、とやけに息を荒らげている。

「どれ、ワシが布団まで運んであげましょう」

その声もやけに遠くから聞こえ、やがて由美子の意識は強烈な酩酊感とともに沈んでいった——。

※

「おやおや、寝てしまいましたか」

海藤謙太郎は、じゅるり、と涎を垂らした。

「いけませんなあ。ワシもまだまだ現役の男だというのに、そんな無防備な姿を見せたら……ばくつ、と食いたくなりますよ」

由美子はすでに寝入っている様子だ。規則正しい寝息を立てており、豊かな胸元が緩やかに上下している。

この様子なら多少のことでは目を覚まさないだろう。

そう、多少のことでは――。

「精力剤を用意してきた甲斐がありますな。楽しませてもらいますよ、奥さん」

海藤は由美子を横抱きにして上体を起こすと、顔を近づけた。くんくんと鼻を鳴らして匂いを嗅いでみる。

「はあ、温泉と石鹸のいい匂いだ」

いかにも清楚な由美子らしい香りを鼻いっばいに吸いこんだ。

楚々とした美しい人妻が無防備に眠り、こうして自分の腕の中にいるのだと思うと興奮が一気に燃え盛った。

股間のモノはすでにギンギンに勃起している。浴衣の上からでも大きくテントを張っていた。

突き出した先端が、浴衣越しに由美子の尻の辺りに当たる。

「どっこいしょ……と」

海藤は由美子を抱き上げた。柔らかな人妻の体の感触が伝わってきて、ますます興

奮が燃え盛る。

「さてさて、町内会長としてお若い夫婦の子作りを手伝ってやるとしますか」

冗談めかしてつぶやきながら、床の間まで移動する。そこには、すでに布団が並べて敷かれていた。

「奥さん。今からがこの旅行の本番ですからね。布団の中でたっぷりしつぽり楽しきましょうや」

海藤は布団の上に由美子を寝かせた。それでも、なお彼女は目を覚まさず、すーすーと静かな寝息を立てている。

「人のいい奥さんには、男と温泉旅館に一泊するということがどういうことか——今からしつかり教えてあげますからね」

無防備に眠り続ける若妻を見下ろしながら、ほくそ笑んだ。

浴衣の合わせ目はわずかに乱れ、湯上がりでほのかに上気した白い肌が垣間見える。人妻ならではの匂い立つような色香を感じ取り、すでに十分勃起している男根に熱い血潮がまた流れこんだ。

「ひひひ……旦那さんは今ごろ自分の奥さんが何をされるのかも知らず、家で一人何をしとるんですかな」

他人の妻をこれから寝取るのだという征服感が全身を灼熱させる。ハアハアと息を荒くしながら、浴衣の合わせ目に手をかけた。

「おや、浴衣にブラジャーは似合いませんよ。それに窮屈そうだ」

海藤は合わせ目を完全に開くと、ブラジャーのカップを上押し上げて、裸の乳房を露出させる。

ぶるん、という感じで豊かな胸の膨らみが一気に飛び出した。

「うほお。こりや、すごいパイオツだ」

海藤は歓喜の声を上げる。

服の上からでも巨乳サイズであることはわかっていたが、こうして生の乳房を目にする、その迫力は段違いである。

仰臥ぎようがしてもほとんど潰れず、美しいフォルムを保った双丘は、二十九歳という成熟した女性の色香をふんだんに漂わせながら、由美子の呼吸に合わせて、かすかに揺れ続けていた。

その頂上部には綺麗な真円を描く薄桃色の乳輪と乳首が色づいている。

「はあ、はあ、奥さん」

見ているだけでは、とても我慢できない。

どうせ由美子はちょっとやそつとのことでは目を覚まさないだろう。今のうちに味わえるものは、とことん味わっておくとするか――。

海藤は由美子の胸元に顔を近づけ、薄桃色をした乳首に吸いついた。

コリコリとした弾力のある左の乳首を吸いつけ、右の乳首は指先でつまみ、弾く。舌と指で左右の乳首を味わいながら、徐々に刺激を強めた。柔らかなニップルはその刺激に反応したのか、少しずつ充血して硬くなっていく。

「ん……ひろくん」

由美子は唇をかすかに開き、寝言をつぶやく。どうやら夫に愛撫されているのだと勘違いしているらしい。

「寝ぼけて旦那さんと間違えてますよ」

海藤は由美子に顔を寄せていく。

「奥さん、ほら舌出して」

「……んあ」

由美子は相手が夫だと信じこんでいるのか、素直に舌を出した。

綺麗なピンク色の舌に、海藤はすかさず舌を絡め、さらに柔らかな唇に己の唇を重ねていった。

美しい人妻のキスを盗んだ悦びで、胸の芯にすうつとした爽快感が込み上げる。本来なら彼女の愛しい旦那しか味わえない唇を、こうして奪い取ってやったのだ。

征服感に浸りながら、くちゅ、くちゅ、と唾液の音を鳴らすディープキスに移行した。甘い味がする唾液を存分に吸い取り、頭の中がカーッと赤熱化するような欲情を覚えた。

あの温和そうな夫は、今こうして愛する妻が寝取られていることを何も知らないのだと思うと痛快である。今までも町内会長という立場を利用して町の若妻を何人も食ってきたが、この瞬間の喜びは何度味わっても飽きることがない。

一盗二婢三妓四妾五妻とはよく言ったものだ。人妻を寝取る快感はたまらなく爽快で、病みつきになるのである。

「ふへへ、下もぐつちよぐちよですな」

由美子にM字開脚のポーズを取らせると、ショーツを膝裏までずり下げる。

あらわになった若妻の秘所はすでに十分潤っていた。きつと、さっきの乳愛撫のおかげだろう。彼にとっては小手調べ程度の愛撫だったのだが、思ったよりも感じやすい女体のようなだ。

「見た目は清楚でも、中身はとんだドスケベですな……おっと、失礼」



海藤はほくそ笑み、あらためて由美子の秘園に視線を向け直す。

黒々とした茂みは愛液で湿り、唇を縦に割ったような形のいやらしい淫裂も濡れて光沢を放っていた。

わずかにはみ出た薄赤色の花びらが、おびえるように震え、ひく、ひく、と蠢うごめいている。そこに突っこんでやったら、どんな感触を味わえるだろうか、と早くも期待感が頂点に達した。

小さな秘孔からは透明な蜜が垂れ、パンティのクロッチ部までツーツと細長い糸を引いている。

周囲に生々しい女の香りがたちこめ、鼻腔をくすぐった。

思った以上に濃密な臭気は牝のフェロモンをふんだんに含み、海藤の獣性をいやがうえにも刺激する。

「酒に精力剤を混ぜておいたのが効いてますかな。奥さんもすっかりエロい気分になつておいでだ、うほほ」

海藤がまた、ほくそ笑んだ。

三年ほど前にも近所の若妻と二人つきりで下見旅行に行き、似たような手口で美味しくいただくさせてもらったが、今回も上手くいきそうだ。

しかも、相手は前々から目を付けていた美人妻である。

いよいよ念願が叶うと思うと、海藤のイチモツには熱い血潮がとめどなく流れこみ、浴衣の下を突き破らんばかりの勢いで隆々と猛った。

※

由美子はぼんやりとした意識の中で、自分がいつの間にか寝ていることに気づいた。まず視界に飛びこんできたのは、木造の天井だ。次に、自分にのしかかる人影が目に入った。

(ひろくん……?)

覚醒しきつていない意識で、由美子は彼をボーッと見つめた。

いや、違う。ここは慣れ親しんだ我が家ではなく、旅館のはずだ。

だとすれば、この人影は一体——?

違和感とともに、背筋に嫌な予感が走り抜けた。

夫にしては体格が横に大きく、腹部がだらしなくたるんでいる。しかも股間に屹立している赤黒いイチモツは、夫のそれよりもはるかに長く、大きく、禍々しい印象を

受けた。

「いただきます」

じゅるり、と生唾を飲みこむ音がした。

嫌な予感がさらに大きくなり、全身の肌が寒気を感じたように粟立つ。次の瞬間、硬いものが秘所の入り口に押し当てられた。

(えっ、ちよつと……?)

そのときになって、由美子はようやく自分の格好に気づいた。

浴衣の前が大きくはだけ、ブラジャーもずれて乳房が丸出した。裾も大きくまくれ、パンティがいつの間にか脱がされている。開いた両足の付け根に黒い陰毛に飾られた秘所が丸見えになっていた。

(えっ……? これ、違うっ……)

夫ではない、と気づき、由美子はパニックに陥った。弘行の分身器官とは感触もサイズも違うし、何よりも全身を駆け抜ける異様なほどのおぞましさは、愛する男との交わりでは決して抱くことのない感覚だ。

上体をわずかに起こし、股間を見つめる。

「あっ……!!」

ずぬぬつ、と鉄のように硬く、すりこぎのように太いモノが肉裂を割り開き、自分の内部にゆっくりと押し入ってくるのが見えた。熱い柔肉をかき分けながら、奥へと突き進んでくる。

(何……これっ!!)

——大きい。硬い。苦しい。太い。

脳内をいくつもの言葉が駆け巡った。

まだ酔いが醒めていないため、思考を整然とまとめることができず、現実への理解が追いつかなかった。

「は、あぐう、うううつ、どうしてなの、これ……えっ……!!」

由美子は弱々しく頭を左右に振り、戸惑いの声をもらすことしかできない。

その間も不埒な侵入者はじりじりと人妻の神聖な領域を犯していく。やがて、長く魁偉なペニスの先端部が、ごつん、という感触とともに子宮に当たり、そこでようやくインサートが止まった。

(嘘、挿れられちゃった……の?)

由美子は強烈な挿入感と酩酊した意識の中で、激しく混乱した。

「うああ……入って、る……?」

——オマ○コ広がつちやう、濡れてる？ 一番奥までキTER。

いくつもの言葉が脳内を駆け巡り、ただでさえ混乱している頭の中をますますパニック状態に陥らせた。

生まれて初めて経験するレベルの、すさまじい拡張感だった。膣が内側からぱんぱんに膨れ上がり、はち切れそうなほどだ。

「はあ、はあ、はあ……」

息が乱れ、呼吸のたびに下腹が震えて、胎内に啜えこんだモノのサイズをあらためて実感させられた。

——堅い。感じちやう。ひろくのと全然違う。かたい。

(誰なの……？ わたしの中に入っている人……？)

嫌な予感とともに、視線をゆっくりと上げていく。

視界に飛びこんできたのは禿げ上がった頭と、欲望でぎらついた垂れ目がちの瞳。大きな鼻と、舌なめずりをした肉厚の唇。

「嘘……!!」

呆然とつぶやきながら、由美子はようやく自分を貫いている男の正体を知った。

「いやっ、やめっ……!!」

(なんで……っ、会長さんっ!!)

そう、自分の中に深々とペニスを差し入れているのは、まぎれもなく町内会長の海藤謙太郎だった。

「ああっ、だめ！　かっ……会長さん！」

あらためて、互いの性器で繋がりが合っている部分を見つめる。

嘘だ、と思った。信じたくなかった。

だが、自分の膣孔を丸く押し開いて差しこまれている魁偉なペニスも、胎内に感じる熱くて硬い肉塊の感触も、あまりにもリアルだった。

これは夢でもなんでもない。間違いなく現実に起きている出来事なのだ、と絶望とともに悟る。

「こんなのだめですっ！」

由美子はそのような悪夢のような現実を振り払うように叫んだ。

悲痛な叫びだった。

あふれるほど濡れた秘所にずつぷりと突き刺さり、内部をかき回してくるたくましい肉根がおぞましくてたまらない。

「抜いてくださいっ！」

「こんなに膣内まで濡らして、やめてってことはしないでしよう」
会長は得意げに笑い、でっぷりした腹部を揺らしてみせた。人の好きそうな彼が、こんなだまし討ちのような真似をするなんて信じられなかった。

「ちが……っ、こんなの……はあ……ん」

由美子は泣きそうな顔で会長を見上げる。

「奥さんだつて気持ちよさそうな声出してるとるじゃないですか」

「う……あ……そんな声出して……ません」

言いながらも、秘孔から甘い愉悅が突き抜ける。胎内を占拠する不埒なペニスを歓迎するかのよう、粘膜が慄いた。

「んはっ……あつ、あつ……」

いけないと思いつつも、声を抑えることができなかった。

（おかしい……どうして……こんなに感じちゃうの……？）

自分の体の変化に戸惑いを隠せない。己の体がすでに準備万端で男を受け入れてしまっていることが不思議でならなかった。愛してもいない男を前に、ここまで濡れるはずがない。

まさか会長はわたしが眠っている間に、入念な愛撫をしていたのでは……？ そんな

なおぞましい想像で全身が粟立つ。

一体どこを弄いじられたのだろう。

乳房か、膣か、他にも——体中を指や唇で触られ、味わわれたのかもしれない。

結婚式の日に一守り抜くと誓った貞操を、自分が知らない間に汚けがされていたというのは、人妻にとってこれ以上ない絶望である。

「ほら、見てくださいよ、ワシのチンポ」

海藤が腰の位置を引き上げると、由美子は反射的に結合部に視線を向けた。

「……っ！」

驚くほど巨大な肉棒が自分の膣はに嵌はまっているのが、薄闇うすやみの中でやけにはつきりと見えた。

(な……こ……こんなのが、わたしの中に挿は入いってるの……?)

「奥さんのイヤラシイ汁でヌルヌルでしょ」

言葉通り竿から付け根や睾丸に至るまでが、由美子の垂れ流したであろう蜜液で濡れ、淫靡いんびな光沢を放っている。

「ああ……奥さんの膣内すぐく気持ちいいですよ」

会長がにやけた顔で腰を振っている。

欲望にまみれた醜悪な表情に怖気が走った。あふれる喜びに表情を弛緩させたまま、会長が顔を近づけてくる。

「いやっ」

キスされる——強烈な嫌悪感で、由美子は反射的に顔を背けた。標的を外した会長の唇が、頬の辺りにぶちゅつと押しつけられる。柔らかな肉とぬめつとした唾液の感触が気色悪かった。

「ああ……」

かろうじて唇の貞操は守れたものの、頬への口づけに汚辱感を覚える。

「若くてプリプリしたヒダがワシの竿に絡みついてきとる」

会長は、ぶちゅ、ぶちゅ、と由美子の頬にキスを続けながら、腰を振った。

恰幅のいい体へのしかかられ、逃れられなかった。杭打機のように力強い抜き差しを浴び続けることしかできない。

すでに十分濡れていた膣洞は、たくましい肉根を打ち込まれるたびに粘膜全体がひとりでに痙攣けいれんし、ざわめいてしまう。

そうして出し入れを繰り返されているうちに、秘孔の内部からは鮮烈な肉悦が湧き上がり、体中に染み渡っていく。

(嘘っ、なんで……)

由美子は全身を震わせて喘いだ。あえ

好きでもなんでもない男に体を奪われている不快感と嫌悪感しかないというのに、なぜこんなにも気持ちいいのだろうか。己の女体が示す快楽の反応に、由美子は戸惑いを隠せなかった。

(どうして、ひろくんじゃないのにつ……!! こんなにつ……!!)

卑怯な男にセックスを強要され、快感を覚えることなど、あつてはならない。それは夫への明確な裏切りでしかない。

なのに、なぜ――。

「ふひっ、奥さんの敏感な場所わかりましたよ」

会長が顔を上げ、勝ち誇ったような笑顔で由美子を見下ろした。

「動きたんびに、ちょうどワシのカリが引つ掛けていくでしょう」

その言葉を実践するようにゆつたりとしたストロークを繰り返し、由美子の中を入り口から奥まで突き上げる。

「ああっ、あう、んっ！」

出っ張ったカリの部分の敏感な粘膜を擦り、妖美な肉悦が膣内で弾けた。

(こんなのだめっ……)

「ワシと奥さんの体の相性がバッチリってことですよ」

「ハアッ……んっ」

また深い場所を突かれ、目の前で火花が散った。同時に体中がゾクゾクと粟立つような感覚が走り、その感覚は蕩けるとろような快感となって体中に広がっていく。

(だめだめ絶対ダメっ……)

由美子は必死で自分自身に言い聞かせた。

意識がない間に犯されてしまったことは、もう取り返しがつかない。だが、今からは違う。

目を覚ました状態でなお快楽を感じてしまつては、本当に夫を裏切ることになってしまう。あつてはならない事態だった。

「はあー、はあー……あつ、ああ！」

だが、会長が絶妙の緩急をつけた腰遣いを浴びせるために、由美子の克己は脆くも崩されていく。ひとりでに膣孔が収縮し、内部に啜えこんでいるモノに粘膜が絡みつき、男を喜ばせる結果になってしまう。

「オホオ、締まる」

会長はニヤニヤしながら、でっぷりとした腰を振った。

「はっ……!! んー……!!」

さらに数度のピストンを受け止めると、ふいに意識の芯が甘く弾けるような感覚が訪れる。由美子は半ば呆然としながら、その感覚を受け止めていた。体中からすうつと力が抜けていくような快感があった。

(うそ……わたし、イッチャって……っ)

屈辱と爽快感の狭間で、膣内から四肢の先にまで広がっていく絶頂感に、由美子は浸っていた。

「はー……」

肺の底に溜まった空気を全部吐き出すように、由美子は深々と息をつく。心臓の鼓動が妖しく高まり、全身がゾクゾクするような痺れはなおも継続していた。

(こんな……ひろくんじゃない人に……好きでもないおじさんに……)

意識がすうつと薄れる中で、自分にのしかかる男を見上げる。

愛してもいない男に体を奪われたのみならず、アクメまで極めさせられた屈辱と敗

北感——。

「まだまだ。こんなものじゃありませんよ、奥さん」

しかも、会長はそんな彼女をさらに打ちのめそうというのか、まだエクスタシーの余韻が覚めない女体をふたたび責め始めた。

ずっぷりと差しこまれたペニスで、肉孔の入り口から奥までを丹念に摩擦する。

若者のような性急なピストンとは違い、老年ならではの落ち着きと熟練を感じさせる腰遣いだった。

「んーっ……んっー！」

イッたばかりの体は敏感そのものだ。会長のゆったりした一突き一突きで、下腹部にじんわりと甘く熱い快楽の火を灯され、由美子を悶えさせる。

「いい声を出しますな。やっぱり人妻はいい。何人食っても、この熟れた反応はたまりませんよ、んほほ」

会長は愉快そうに笑い、腰の動きを少しずつ速めていった。

「あっ……はあっ」

(いや……!)

由美子は内心で悲鳴を上げた。

これ以上感じてはならない。

わかっていても、女体の反応は止められなかった。

「はっ……あ」

ずんつ、と深く入れられ、また声もれる。

(なんで……こんなの初めて)

頭の中が真っ白になる——というのは、こういう心地のことだろう。意識が性悦一色に染まり、他のことは何も考えられない。

(挿入されて突かれてるだけなのに、イカされるなんて……)

荒くなった呼吸を整えていると、会長の顔が近づいてきた。

「ハア、フウ、フウ」

キスされる——そう悟りながら、先ほどとは違って、もはやそれを避ける気力すら湧かなかった。

次の瞬間には、ぶちゅつ、と音を立てて会長に唇を奪われていた。

「んんん……っ！」

夫以外の男に思うさま唇を吸われながら、由美子はなおも快感に浸る。

気持ちいい……夫とのセックスでは一度も味わったことのない、圧倒的なまでの快楽量だった。

(会長さんの大きいから……?)

理性も思考も薄れていく中で、ぼんやりとそんなことを考える。

「ん……」

重ねられた唇からもれたのは、切なくも甘い吐息だった。

(本当に体の相性がいいってこと……?)

頭の片隅をよぎった考えを、由美子はすぐに否定した。セックス面で会長が夫より勝っているなど、認めるわけにはいかなかった。

(そんなの、やだ……)

力なく唇を吸われながら、由美子は心の中でつぶやく。

「ふはあ、はあ……」

会長はいったん唇を離すと、興が乗ってきたらしく、たるんだ下腹をぶつけるようにしてピストン運動の速度を上げてきた。

「フン、フン、フン」

鼻息も荒く、由美子の最深部を連続して突く。出し入れされるたびに、攪拌された肉壺がざわめき、粘膜が歓喜に震えるようだ。

「はっ、あっ、あっ」

ごりっ、と子宮に強烈な打突を受けた瞬間、目の前で鮮烈なスパークが弾ける。

(あつ……またイクッ……)

すうつと意識が浮き上がり、体中が溶け落ちるような心地よさに包まれた。目じりからツーツと涙が流れ落ち、半開きになった唇の端から涎がこぼれる。

「……っ」

もはや声にならない。かすれた嬌声きょうせいは切なげな吐息になり、室内に漂った。

「んっ——……!! ん……っ」

会長は由美子が二度目のオルガスムスに達したのを確認したのか、ニヤリと笑った。征服感にあふれたその笑顔が、敗北感を煽る。

愛する夫以外の男に、こうもあつさり二度もイカされるなど、人妻として最大の屈辱だった。だがそれ以上の快樂が、ネガティブな気持ちを押し流していく。

会長の腰遣いは一向に緩む気配がなく、由美子の最深部を容赦なく突き続けた。

(どうしてこんなに長時間動いてられるの? ……ひろくんだつたら我慢できずに、とつくにイツちゃやはずなのに)

「はっ、はあ……んっ……はあっ、はっ……」

間断なく込み上げてくる肉の悦びに、由美子はほんろう翻弄されつ放しだ。

(会長さんのセックスが上手すぎるの……?)

「後ろからも突いときますか」

会長は猛々しいモノで由美子の内部を貫いたまま、それを軸にして彼女の体を半回転させた。

驚くほどスムーズに正常位から後背位へと移行する。

「もういや……あつ、あ……」

由美子の懇願などお構いなしに、今度はバックスタイルでの抽送が始まった。

「終わって……ください……はっ、あ……！ わたし、おかし……なっちゃう……

……はあつ……！」

四つん這いになって尻を高々と掲げた格好が、より屈辱感を煽る。

会長に『征服されている』という被虐の実感が高まり、全身が灼熱するように火照った。

「そうですね……そろそろ一発射精して、いったん休憩にしますか」

会長はさらに深い場所まで、ずぶりっ、と突き入れる。子宮口に亀頭がめりこむのがわかり、由美子は背中を弓なりにして喘いだ。

「んっ、あ、あつ、ああ……はあつ」

荒々しく突くだけだった腰のリズムが、徐々に変化していく。

奥まで入れたまま、小刻みな抽送へとシフトチェンジしているのは、射精への準備段階に入ったということだろう。

やっとこの暴虐なセックスから解放される——由美子が安堵したのも束の間、「ワシは中出しじゃないとイケないですがいいですか？」

会長は信じられないような言葉を平然と口にした。腰の動きがふたたび元のリズムに戻り、じつくりと女体をなぶってくる。

「な……何を……そんなの……」

由美子は目の前が真っ暗になり、呆然とうめいた。

人妻である自分に対し、避妊もせずに膣内射精しようなどと、どういう了見なのだろうか。

「だめに……決まってるじゃないですか……!」

由美子は背中越しに振り返り、猛然と叫んだ。孕んでしまう危険性があるというのに、許容できるはずがなかった。

「んっ——中はダメっ」

そんな彼女の抵抗の台詞を封じるように、会長が巧みなタイミングで奥を突く。絶妙の圧迫感と摩擦感で全身に肉悦の波が広がり、弾けた。

「——っ！」

由美子は固く目を閉じ、シーツを握りしめて、高まる快感に耐える。

「んっ、あ……はっ……あー……はあ」

だが会長のピストンは緩急自在の動きで、若妻の性感を揺さぶってきた。

じわじわと確実に上昇する肉悦は、夫とは比べ物にならないほど強烈だ。しかも終わる気配がなく、延々と由美子の最奥を貫いてくるのだ。こんな快感が続いていたら、おかしくなってしまうそうだった。

「外にっ……出してっ……はあ、はっ、んっ」

由美子は悲鳴混じりに懇願した。

愛する夫ではなく好きでもなんでもない相手にこれほどの快感を得ている事実だけでも、彼女の心を今にも折ってしまいそうなのだ。

そのうえ中出しまでされてしまったら、もう立ち直れないかもしれない。胎内へ子種を放出されることだけは防がなければならなかった。

「……ください……お願いします……んっ……!!」

「そりゃ困った。いつまでたつても終わりませんよ」

会長は取りつく島もない。悠然と腰を遣い、今度は膣内の浅瀬にあるGスポットを

擦り上げた。

「んっ、ぐ、んはっ」

それからふたたび奥を連続して突かれる。膣底が激しく震えた。

「奥さんの子宮は——早く射精してとワシの亀頭に吸いついてきとるんですがね」
会長が由美子の upper body を引っ張り起こした。

すでに浴衣は完全にはだけており、形のよい豊乳は丸出し状態だ。

ピストンに合わせてダイナミックに揺れる乳房を会長が太い指で無遠慮につかみ、強く揉んだ。

「まあワシも歳ですから、そう何度もイケないんで——」

「はあーああつ……はあー……」

由美子の息遣いがさらに荒くなった。

乱暴ともいえる乳愛撫さえ、高ぶった女体は快感として甘受してしまう。

「このまま朝まで奥さんだけイカせ続けても構いませんけどね」

言いながら、会長が由美子の唇を奪った。

「そんなの無理……お願いします」

もはやキスの嫌悪感ほとんどなく、蕩けるような快感が圧倒的に勝っていた。ね

じこまれた会長の舌に己の舌を搦め捕られながら、由美子は重なった唇の隙間から哀願の言葉をもらす。

「体もたない……おかしくなっちゃおう……！　はあ、はあっ……早くイッてくださ
いっ……！」

「いいんですか？」

会長がいたぶるように強烈な突き上げを見舞った。

「……っ、んっ……ふっ」

唇を塞がれたまま、由美子は潰れた嬌声をもらった。

「オホオ、またイキましたなあ」

三度目の絶頂に達したことに気づいたのか、会長がにたりと笑って腰を揺らす。

「はっ、はあ……中出しっ、だけはっ……絶対ダメです……！　他のことなら何でも
しますっ……」

由美子は断続的に訪れるアクメの余韻に酔いしれながら、必死で理性を呼び覚まし
て制止の言葉を紡いだ。

「ひっ、は……はっ、あはー……たぶん……今っ、危ないっ、日……だから……っ、
はっ、はあっ、赤ちゃんできちゃう……」

悲鳴混じりに懇願する。

すでに貞操を汚されてしまった事実は変えられないし、もはや消えることのない汚点だ。その上、もしもこの一夜の過ちで妊娠までしてしまったら——取り返しのない事態を招いてしまう。

「ほほお、赤ちゃんが……それはそれは……」

絶対に避けなければならぬ——頭ではわかっているのだが、女としての生理的な反応は止めようがなかった。

「ああっ……！！ いや……イク……イクッ！ んあああっー！」

（もうダメ、死んじゃうっ……）

会長は由美子の性感を熟知しているかのように、緩急自在の腰遣いで何度でも快楽の火を灯してくる。四度、五度と信じられないほどの頻度で絶頂を味わわされ、由美子は戦慄した。

「よっと」

会長は軽い掛け声とともに、先ほどと同じ要領で結合部を軸にして、由美子の体をもう一度反転させた。

バックから正常位へのスムーズな移行である。

「お願い……もう……」

由美子は絶え絶えの息を吐きながら、消え入りそうな声でうめいた。

「もう腔内なかでいいから……」

もはや理性的な判断など不可能だった。

この永遠に続くかのような妖美な艶責めから解放されたい。その一心だけで、由美子は降伏の一言を告げた。

「早くイッてください……はー、はーっ」

「ふひっ、いいんですね」

会長が満面の笑みで由美子を見つめる。

「……………」

今まで以上の敗北感と、そして夫への申し訳なさが胸の中を押し潰した。

愛する夫以外の男に屈服し、妊娠の危険も顧みずに腔内射精を受け入れる言葉。

人妻としての最後の一線を、それも自分の意志で踏み越える禁断の言葉。

（ごめんね、ひろくん……）

由美子は泣きそうな気持ちで目を閉じる。

これ以上、会長の勝ち誇った顔は見たくなかった。

こくん、と小さくうなずく。

それが合図だった。

「はあはあ……っ、由美子さん」

会長の抽送運動が一気にピッチを上げた。

奥まで入れたまま、小刻みに突いてくる。先ほどと同じく、フィニッシュを意識した腰遣いだ。

今度は由美子をいたぶるように腰を緩めたりせず、放出するまでとことん突く気だろう。

「……っはっ、ああっ……!!」

男の激しい欲望を叩きつけるようなピストンを浴びて、由美子はたまらずに声を上げた。

「ほんとに射精だしますよっ」

「ああっ、はあっ、いっつ、き、気持ちいいっ！」

会長の宣言に答える余裕もなく、由美子は嬌声を上げ続けた。

「ナマで由美子さんのマ〇コの中にたっぷりワシの精子を射精だしますよおっ！ フンッ、フンッ、フンッ！」

鼻の穴を膨らませ、口の端から涎を垂らして、一心に腰を振る会長の顔が見えた。夫のように優しい愛情ではなく、浅ましい欲望のままに自分の体を貪り、後先も考えずに中出しを敢行しようとしている男の顔を。

「イキますよっ、由美子さん」

会長は上体を倒し、由美子の全身を押さえこむようにして口づけしてきた。

「あっ……はっ、あ……んっ」

唇を吸われながら、由美子は喘ぐことしかできない。

「ワシの特濃ザーメンたっぷり奥で味わってください」

会長の出し入れはさらに小刻みになり、やがて太い男根を付け根まで差しこんだ状態ですべての動きが止まった。

「ああー、イクイクッ……由美子っ、中に出すぞっ！」

「はっ、あっ……！ あっ……っ！」

深々と打ち込まれた会長の分身器官から、おびただしい量のザーメンがほとぼしり、由美子の膣に注ぎこまれた。

どくっ、びゅくびゅくびゅくっ、と力強く脈打つペニスに次から次へと濃厚な白濁液を放出する。

膣内にあふれ返り、子宮口にまで怒涛の勢いで押し寄せる大量のスペルマは、頭がくらくらするほど強烈な衝撃だった。

「ああっ、んん、くは、お、っ！ ああああああーっ！」

由美子は夢中で会長の首に両手を回し、太った体を抱きしめながら絶叫した。

とうとう出されてしまった、という絶望は、胎内で子種液を受け止めた女としての充足感によって塗りつぶされていく。

嫌悪も、屈辱も、生物的本能の前では無力だった。

膣内射精の圧倒的な快感と爽快感に、由美子は何もかも忘れ、身も心も性の快楽によつて流されていくのを感じた。

長い長い射精を終え、会長はゆっくりと剛棒を引き抜いた。

先ほどまで太すぎるほど太いペニスを咥えこまされていた膣孔は、占拠していたモノが抜けてもなお、その形を維持してポツカリと口を開いたままだ。

濡れ光る薄赤色の肉層は白濁に染まり、収まりきらなかつたスペルマが、ごぼつ、と音を立てて逆流していた。

「いやあっ、この日のために用意した特製精力剤が効きすぎて効きすぎて……まいった萎えません」

立ち上がった会長が由美子の眼前に己の男根を見せつけた。

「悪いですがもう一発やらせてもらいますね」

言葉通り、隆々とそそり立った肉棒を見つめ、由美子は呆然となった。

「ちよ……つと、待って……」

弱々しく制止の言葉をつぶやくものの、会長の言葉に抵抗する気力はもはや失せていた。

彼が満足するまで、きつと自分は解放されないのだ――。

「ほら、まずは綺麗にしてもらいましょか」

会長は胡坐あぐらをかいて、軽く腰を揺らした。

「綺麗に、つて……?」

たずねながらも、その意味を反射的に悟った由美子は、会長の下腹部に視線を落とす。

両足の付け根で赤黒い男根が垂直に近い角度を保ち、屹立している。六十代半ばとはとても思えない旺盛な精力だ。

一度射精すれば、すぐに萎えてしまう夫とはまるで違う。

すごい——思わず見惚みぼれてしまいそうになる。

「精液と由美子さんのいやらしい汁で汚れてしまったワシのチンポを、口で清めて欲しいんですよ。お掃除フェラというやつです」

由美子の前で、白濁色の精液と透明な愛液にまみれ、淫靡な光沢を放つペニスが揺れた。

鼻の粘膜にまで染み通るような、強烈な生臭さが漂ってくる。

(こ、これを……口で……?)

お掃除フェラなど、今までの人生で一度もしたことがなかった。そもそも精液を味わった経験もないのだ。

まして愛する夫ではなく、酔った勢いのような形で不本意に体を許してしまった相手に——さすがに忌避感が勝った。

「どうしました？ チンポを清めてくれんと、二回戦が始められませんか」

「わ、わたし、そんな……」

由美子は半ば無意識に顔を背けようとした。

が、それより一瞬早く太い肉棒の先端が口元に押しつけられる。ぐちゅ、と唇に熱い亀頭部が当たっていた。

ザーメンの青臭い匂いが鼻腔を刺激する。先ほどの濃密な交わりを嫌でも思い出してしまい、下腹の芯がジュンと疼いた。

「ああ……」

ため息をもらしながら、由美子は思わず亀頭にチロリと舌を這わせた。

「んぐ、ちゅ……む、ぐううう……んむ」

「おほ、おおつ。いいですよ、由美子さん。その調子……本当にお掃除フェラは初めてですか？」

「は、はい……んん、あむう……れろお」

言いながら、半ば無意識に舌を亀頭に巻きつけてしまう。

苦く、濃厚なザーメンの味が舌全体を刺激した。美味には程遠い——だが妙に癖になるような、不思議な風味。

会長の牡性を濃縮したような味だ。

「ねつとりとベロがチンポに絡みついてきて、そうそう、その調子……帰宅したら旦那さんにもぜひ試してあげてください。きっと喜びますよ」

会長はニタニタと笑いながら腰を揺すった。

口内でペニスが暴れるように揺れる。それを舌で押さえつけ、由美子はなおも魁偉

な肉棒に舌を這わせ続けた。

さらに頬をすぼめて竿に付着した精液や愛液もこそぎ落とす。

「そうそう、ペロだけじゃなく口全体を使ってチンポに奉仕するんです。夫婦生活でもそういうテクニクは有効ですからなあ」

会長の言葉はまるで教え子に対する教師のようだ。

由美子はその教えを實踐するように、半ば無意識に舌の動きを激しくする。今までよりも大きくくねらせ、波打たせ、亀頭部を強く吸いながら舐めしゃぶった。

「ん、ちゅ、ぢゅうううう、会長さんの、大きく……な……はむう」

淡泊な夫と違って、会長は彼女の舌遣いに合わせて、逐一快感の反応を示してくれる。言葉でも、そしてペニスの動きでも。

それが女としての充足感を心地よく満たしてくれる。

同時に、夫以外の肉棒に一心不乱に奉仕しているこのシチュエーションが背徳的な悦びを煽った。

「いや、旦那さんは怪しむかもしれませんが。どこでそんなエロテクを覚えてきたんだ、とか」

「っ……っ！」

会長の言葉にギクリとなり、由美子は思わず肉根を吐き出した。

「どうしました、由美子さん？」

「も、もう、会長さんの……綺麗になりましたから」

由美子は相手を軽くにらんで、言った。

「ふふ、ワシの言葉が気に障りましたかな。いや、別に由美子さんと旦那さんの関係にヒビが入るようなことは望みません」

会長が肥えた腹を揺らして笑う。

「ワシとの一夜の体験も、そう……夫婦関係にちよつとした刺激を与えるスパイス代わりだと思ってもえればいいんですよ」

「スパイス……ですか」

「ワシとのセックスの後に、旦那さんと寝てごらん下さい。きっといつもより新鮮に感じることでしょ」

会長がまことしやかに演説した。

「これから先、何十年も一緒にいる相手なんですから、たまにはこういう違ったことをして刺激を取り入れるのも……夫婦円満の秘訣ですよ」

夫婦円満——。

本当にそんな効果があるのだろうか。

確かに、会長は長い間、良好な夫婦関係を築いているようだが――。

「刺激を取り入れる……ですか」

先ほどの彼の言葉を繰り返してみる。声に出すことで、浮気セックスの罪悪感が多少なりとも薄れる気がした。

「気を取り直して続けましょうか、由美子さん」

会長が由美子に手を伸ばして抱き寄せた。

ちゅっ、と額や頬に軽くキスをされる。

「は、はい……」

うなずいたところで今度は唇にもキスをされた。すでに何度となく唇を奪われていたとはいえ、やはり好きでもなんでもない男と口づけを交わすことには強い抵抗感を覚えた。

反射的に唇を離して顔を背ける。

「ワシもさつきさんごん腰を振って、少し疲れました。もう歳ですな」

はは、と笑いながら会長は布団の上に仰臥した。

「まあ、こつちだけはまだ元氣ですが」

その言葉に由美子はふたたび視線を会長に向ける。

ごくりと息を呑んだ。歳だと言いながらも、下腹部ではまるで十代のように元気なイチモツがまつすぐにそそり立っている。

「由美子さんが上になってもらえますか？ 騎乗位です」

「わたしが、上に……？」

かあつと頬が熱くなった。

騎乗位は夫相手にもほとんど経験がない。自分から積極的に腰を振るその体位は、由美子にとって強い羞恥心を伴うものだった。

「恥ずかしいなら、向こうを向いて跨がってはどうです？」

「えっ、向こうを、つて？」

「ワシに背中を向けた状態で、騎乗位でまぐわうんですよ。それならお互いに顔が見えないから、それほど恥ずかしくないでしょう」

なるほど、と思った。いわゆる背面騎乗位だ。

「……じ、じゃあ、いきますね……？」

由美子ではっぷり太った会長の腹に両手をつき、腰を跨いだ。背中や尻に、欲望の籠もった視線が突き刺さるのを感じる。

やはり、恥ずかしい。

とはいえ、顔を見られないのは幸いだった。

由美子は屹立するペニスを両手で支えると、ゆっくりと腰を下ろしていく。ずちゅつ、と濡れた肉裂を割り開いて、たくましい肉根が秘孔に入ってきた。

「ん、くう……はふ、ああん、んっ」

少しずつ肉の凶器が由美子の狭苦しい膣を占拠し、埋めていく。

（大きい——）

自分のペースでじりじりと挿入を深めているためか、男性器のサイズをより実感することができた。

先ほどに比べて膣が馴染んできたのか、あるいはたっぷりと濡れているせいなのか、会長の巨根を膣洞に収めるのが、それほど苦しくない。

強烈な拡張感に相変わらずだが、ずるり、と濁った水音を立てて、最奥まで飲み込むことができた。

同時に肉づきのよい尻で会長の腰の上に着地する。

重たげな乳房が、ぶるんっ、とダイナミックに揺れ、上下動した。見下ろせば、前をはだけ、帯でかろうじて浴衣をつなぎとめている状態だ。

そのはしたない格好に羞恥を覚えつつ、下腹に意識を移す。

（ああ、全部挿れられてしまった——）

由美子は腹の底を押し上げるように潜りこんでいる男根の存在感を意識しながら、部屋の天井を見上げてため息をついた。

先ほどは酩酊状態の間に気が付けば貫かれていたり、会長にのしかかられて半ば強引に挿入されてしまった。だが、こんなふうに関心で自分の意志で肉棒を胎内に迎え入れるのは初めてのことである。

（今度は無理やりじゃない……）

夫に対する、より明確な裏切り行為だった。

だが、もはや止まることはできない。挿入しているだけでは生殺しだ。

腰を動かせば、きつと快感を味わえるに違いない——そんな衝動から、由美子はほとんど無意識に腰を揺すり始めた。結合が外れないよう、最初はゆっくりと、小さな振り幅で腰を前後動させる。

「おや、ぎこちない腰遣いですなあ」

「だ、だって……慣れてないので」

「慣れだけじゃないでしょう。遠慮しているんですか、由美子さん？ はしたないと

思われるのが嫌だ、とか」

凶星を指されて、由美子は表情をこわばらせた。もつとも、会長からは自分の表情の変化は見えないはずだが。

「普段と違って思いっきり腰を振っていいんですよ？ 旦那さんを相手にするときのような遠慮はいらんでしょう？ ほら、もつと腰を動かして」

「こ、こう……ですか？」

由美子は遠慮がちに、だが先ほどよりも大きな振り幅で腰をグラインドさせた。徐々にその幅を大きくしていく。

内部にはまりこんだ会長のペニスは相変わらず鉄のように硬く、太い。

下腹部を前後動させるたびに、膣が収縮して男根のたくましさを感じ取ってしまう。

(あ……これ、気持ちいい……っ)

由美子は体を仰け反らせて喘いだ。

腰の動きでペニスの挿入角度や深度をコントロールできるため、より自分が気持ちいい場所に上手く当たる。膣内を心地よく擦れる。

会長と顔を合わせずに済むため、羞恥心がそれほど強くない。由美子の腰遣いは次

第にダイナミックに、激しいものへと変わっていった。

より大きく腰を振る。前後に、上下に振りたくる。

その結果、長大な肉棒が濡れた肉壺を何度となく出入りし、出っ張った雁が敏感な粘膜を満遍なく擦り立ててくる。

腰を動かすたびに腔内の性感がどんどん目覚めて加速していくような感じだった。動けば動くほど気持ちよさが増していく。

「おっ、ほお……！ 積極的じゃないですか、由美子さん。清楚な顔をして本性はなかなかスケベなんですなあ」

「い、嫌、そんなこと……言わないでください」
かあつと頬が熱くなった。

顔が見えなくて本当によかった、と心から安堵する。

恥ずかしくてとても顔を合わせられない心地だった。

「ワシも由美子さんに一方的に責められっ放しなのは性にしょう合わないんで、少し反撃させてもらいますよ……つと！」

言うなり、会長が力強く腰を突き上げた。

「あう、んっ、ああ、はあ、んんっ！」

ずん、ずん、と腹の底を突かれ、体が浮き上がりそうになるほど強烈なピストンを連続して見舞われた。膣底を激しく揺さぶるような抽送に、たちまち由美子の快感のボルテージが急上昇する。

「じゃあ、そろそろイキますよ……っっ」

「えっ、あの、出すんですか——」

由美子は激しく揺さぶられながら、たずねる。

背後で会長がにやけているのが手に取るようにわかった。

頼んだところで中出しをやめてくれるような男ではない。それに、どのみち先ほどの交わりでも膣内に射精を許してしまっているのだ。今さら一度も二度も同じことかもしれない。

（どうしよう……また、中に出されちゃう……!）

もちろん阻止するのは簡単だ。腰を浮かせて結合を解くだけでいい。

なのに、腰が上がらなかつた。

心の片隅で、濃厚な牡のほとばしりを体の奥でもう一度受け止めてみたいという欲求がひそかに芽生えていたのだ。

「ああ……わたし、どうしてこんな……」

やるせない気持ちで由美子は天井を仰ぎ、嘆声をもらした。

「もちろん中出しですよ。由美子さんだって、また熱いのを注ぎこまれたいんじゃないですか？ マ〇コの中に思いつきり男の精子をぶちまけられるのは気持ちよかったですしょう？」

会長が背後で得意げに笑っているのを感じた。

由美子は答えを返せない。次の瞬間、力強い突き上げを受けて、体が軽く浮き上がった。出し入れの調子がどんどんスピードアップしていく。

「ああっ、あうう、んんっ！ ひいつ、ひあ、あああっ！」

それにつれて由美子の得られる快感も加速度的に上昇した。

その愉悅が最高潮に達するのを見計らったように、会長がひととき強く腰を突き上げ、由美子の最奥を深々と貫く。

「出さず、由美子っ！ ワシの子種をしつかり受け止めろっ！」

獐猛な雄たけびとともに、大量のザーメンがふたたび胎内にあふれ返る。

一度目に勝るとも劣らない勢いで次から次へとほとばしる精液の奔流ほんりゅうに、由美子は圧倒された。

こんな強烈な中出しを受けたら、牝として屈服せざるを得ない。それほどの勢いで



膣粘膜から子宮口まで牡の粘液がぶちまけられていく。

「ああーっ……あっづううううっ、イクイクウツ！」

二度にわたる膣内射精を浴びて、体中が蕩けていくのを実感し、由美子の意識は強烈なエクスタシーとともに薄れていった――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>